

十八世紀におけるエジプト・シリア社會・經濟を傳える新しい史料として、マグリブ巡禮記の重要性を強調したい。本發表では、ムルーク朝 سلطان al-Mansur Iata'qa 時代にアレキサンドリア、カイロ、クース、アイザーブを通り、紅海を渡ってジッダからメッカ巡禮を果たしたセウタ生まれの人 P. T. El-Jib による巡禮記 *Mustafad al-Rihla wal-Itirab* をとりあげて、とくにクース・アイザーブ道をめぐる國家・遊牧民・商人たちのかかわり方、交通運輸の具體的なあり方について考えてみたい。

アンカラ戦以後のオスマン・ティムール

兩朝關係

小山皓一郎

一四〇二年のアンカラ會戦と、これに先立つオスマン・ティムール兩朝關係については、既に加藤和秀氏の論考もあり、比較的研究されているが、この戦いの戦後處理とティムール朝のアナトリア支配にはあまり関心が寄せられていない。これは一つにはオスマン朝の再起が速やかであったため、ティムールの征服が一過性の暴風のように受けとめられたためであろう (P. Wittek など)。しかし、ティムール朝の *suzerainty* (Stanford Shaw) はティムール死後も存続したと見られ、これはオスマン朝の歴史において、從來考えられた以上の意味を有したのではあるまいか。

本報告においてはアンカラ戦以後のオスマン・ティムール兩朝關

係について、まず史料に見える事實を洗い直し、ついで同時代人がこの兩朝關係をいかに認識していたかを見ていきたい。史料の提供する情報は決して充分とはいえない。敗者であったオスマン朝側の史料は、ティムール朝に對する從屬的關係について寡言であり、またティムール朝史料は僻遠のアナトリアには多く言及しない。ここで注目したいのは、第三者として兩朝關係を見守っていたビザンツの史料である。本報告ではオスマン、ティムール、ビザンツ側の諸史料を用いて、標題のテーマに關する情報整理を行ないたいと思ふ。

東部ジャワのムスリム村落における

イスラムと慣習

今永清二

インドネシアのイスラム社會においては、イスラム教と土着のアニミズムとが果層化して信仰され、ムスリム村落ではさまざまな慣習 (アダット) が現實的機能を果しているといわれる。

報告者は昨年十月、東部ジャワのジョンバン縣下のカンボンヒブドゥグで、イスラム法と慣習に關するヒアリングを行い、ムスリム生活について調査を実施した。

カンボンヒブドゥグは三〇一戸からなる農村で、信仰心の厚いムスリム村落であるとの印象をうけたが、同時にさまざまな慣習が行われており、調査の主要項目であった結婚・離婚においても、イス